石神遺跡の調査（飛鳥藤原第122次）

石神遺跡は7世紀代の遺構が重層的にみつかっている遺跡で、特に斉明朝（655～661）の建物群は飛鳥の迎賓館と考えられています。今回の調査は建物群の北限を区切る溝と塀のさらに北側の状況を解明することが目的で、2002年7月からおこなっています。

調査区の下層、斉明朝以前はほぼ全面が沼のような低湿地で、ここが施設の外であることを示しています。天武朝（672～686）のころには一部を整地して、調査区中央は池状、あるいは幅の広い溝になっています。藤原宮（694～710）のころには調査区東側に道路と幅4m、深さ1mの大きな素掘りの南北溝が通り、中央には石敷と井戸がつくられました。

遺構の数は少ないのですが、土器、木器、木簡など多量の遺物には目をみはるものがあります。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　冨永里菜）